

選ばれしもの、それが雑草である

踏まれても、踏まれても、なお立ち上がる雑草魂。

しかし、それは人間の勝手な思い込みで、実は雑草は弱い。でも、踏まれるのはイヤではない。それは生存戦略だから。

「みちくさ研究家」でもある稲垣さんに聞いた。

静岡大学大学院教授

稲垣栄洋

●いながき・ひでひろ 1968年静岡生まれ。岡山大学大学院農学研究科修了。農林水産省、静岡県農林技術研究所などを経て現職。『身近な雑草の愉快な生き方』（ちくま文庫）、『雑草は踏まれても諦めない』（中公新書ラクレ）、『都会の雑草、発見と楽しみ方』（朝日新書）、『散歩が楽しくなる雑草手帳』（東京書籍）など著書多数。

雑草は強くない？

雑草には「たくましい」「強い」といったイメージがあります。ところがイメージとは裏腹に、雑草はじつは弱い植物なんです。

「えっ!? どういうこと!?」と思われるかもしれませんが、ここで言う「弱い」とは「競争に弱い」という

こと。自然界では常に激しい生存競争が行われています。植物の世界でも、太陽光や水、土を奪い合って熾烈な戦いが繰り広げられている。雑草は、そうした競争の場で生き抜くことができないものたちなのです。

実際にどこにでも生きてくるように見えて、植生豊かな森の中に雑草はありませんよね。タンポポ（蒲公英）にしても、ハイキングコースやキャ

ンプ場といった、人間が管理している場所では見かけることがあっても森の中にはいない。植物がひしめき合う森の中は弱肉強食の世界です。強いものしか生き残ることができず、そこで勝負しても負けてしまうからです。

競争に弱いことは自然界では致命的です。勝てなければ滅びるしかなく、子孫を残していくこともできな

くなります。それなのに「雑草は強い」と思われている。なぜかという点、雑草は自分たちの強さが発揮できるところを選んで勝負しているためです。

自然界の中には競争を必要としない場所もあります。「強いものだけが勝つ」という競争原理から離れた場所を選べば、弱くても生き残ることができます。雑草が得意としているのはそうした場所で、具体的には変化する場所、それも何が起こるかわからない「予測不能な変化をする場所」です。

雑草が生えているのは、よく踏まれる道端であったり、草取りや草刈りをされる場所であったり、耕作地であったりと、いつ何が起こるか分からないところが多い。こうした場所は、植物の生存にとって決して恵まれた環境ではありません。

生き残るとしたら、強いことよりも、予測不能な変化を乗り越えられる力が必要とされます。競争に弱いからこそ雑草たちは、変化に対応する道を選び、「戦わないで生き残る」を基本戦略としたのです。しかも、その場の環境に合わせて自らを変化させる力が非常に大きい。

動物には、その場の環境に合わせて自在に大きさを変える能力はありません。けれども植物の場合、環境に適応して、本来のサイズより二倍も三倍も大きく成長するといったことはざらです。そんな植物の中でも雑草は、変化して環境に適応できる能力がとりわけ高いのです。

たとえばスズメノカタビラ（雀の帷子）という雑草があります。ゴルフ場の主要な雑草のひとつですが、ティ、フェアウェイ、ラフ、グリーンで穂をつける高さが違うんですね。

なぜならラフの芝は高い位置、グリーンは地面すれすれの位置など、それぞれのエリアで刈られる芝の高さが異なるからです。

芝と一緒に穂が刈られないよう、スズメノカタビラは場所ごとの芝の高さに合わせて、芝よりもちょっと低い位置に穂をつけます。おもしろいことに、各エリアから種を採ってきて、同じ条件にして育てても元々生えていた場所の高さで穂をつけるんです。グリーンから採取してきた種は、やっぱり地面すれすれの位置で穂をつける。すごい環境適応力だと思いませんか。

踏まれても立ち上がらない

大学で雑草学を学んでいたとき、雑草に関していちばんおもしろいと思ったのは、必ずしも凶鑑に載って